



茨城県

山田 洋子さん(権現堂)

取材者：茨城大学大学院 人文科学研究科 川又
取材日：10月12日

いつか家族がそろう日を目指して



▲洋子さんと夫・正昭さん
孫・圭祐くん(左)と拓実くん(右)

震災発生時、家族全員はそれぞれ仕事や学校で離れ離れの中、度重なる余震におびえながら必至に耐えた。日が暮れてから家族は再会。あれからすでに7カ月。今でも家族は離れて暮らしている。

相馬市内で開かれた会合に出席中、激しい揺れに襲われた。幸い、けがは無かったが、携帯電話もつながらず、土木業を営む夫と次男、南相馬市内の会社に勤める次男の妻と連絡が取れなかった。
「孫二人(次男の子)は大丈夫か...」
それぞれ小学校と幼稚園に居るから大丈夫と思いつつ心配だけが心をよぎる中、自宅を目指した。普通ならば1時間程度の道のりだが、いたるところで道

路が損壊し、断続的に渋滞していた。自宅に着いたのは夕方、日が暮れた後。家族全員が再会したのは夜遅くになってからだった。自宅内は家財が散乱していたが、一部屋を片付け、家族全員が身を寄せ合って一夜を過ごした。
翌日、町内に嫁いだ娘から避難について知らされ、家族とともに南相馬市内を経て、赤宇木にある親戚宅に移動した。そして、15日未明、遠方へのさらなる移動を決定。親戚を含め合計10人、自動車4台に分乗して姪が住む茨城県結城市を目指した。
幸い、姪の自宅には離れがあり、そこに約1カ月間身を寄せた後、4月下旬、現在生活している市内の雇用促進住宅に落ち着いた。その後、勤務先の事業再開のため次男夫婦が南相馬市内へと移った。私たち夫婦と孫2人の4人、次男夫婦2人、それぞれ離れ離れの生活が始まった。

震災前まで、夫の営む土木業の事務仕事をしていた私は、毎朝、現場に出かける夫と次男、勤務先に向かう次男の妻、学校

や幼稚園に向かう孫を送り出し、夕方また元気に帰宅するのを迎えるのが日課だった。日中、家事を済ませた後は、買い物から近所に住む友人と茶飲み話に花を咲かすもの楽しみだった。しかし、そうした当たり前としか思っていなかったことが無くなってしまった。それから半年以上経過した。その間、一時帰宅で浪江に戻ることはあったが、地震で壊れたままの自宅の中は、風雨にさらされ続けているせいか、埃とカビだらけ。変わり果てた街と自宅に呆然とした。
結婚以来、夫とともに二人三脚で歩んできた。次男が家業を継ぎ、孫も成長して、ようやくこれからと思っていた。家族6人、平和な日々だった。今は、仕事のために離れて暮らす次男夫婦に代わって孫2人の面倒をみる日々。今はその孫の元気な姿をみることだけが、私と夫にとって心の支えになっている。そして、一日でも早く、家族が離れて暮らす日々が終わりを告げるときが来ると信じて、今、この時を生きていきたい。

浪江のこころ通信

・第5号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

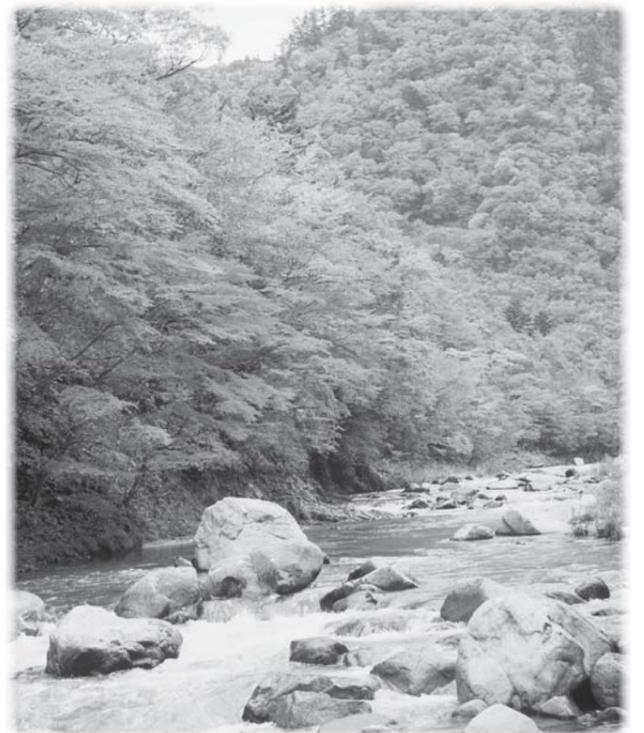
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第5号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





矢野 正さん(牛渡)

取材者：(特活) ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋
取材日：10月17日

人情豊かで、歴史深い浪江町に帰りたい

私は、震災当日は、一人で自宅にいました。一時的に高台にある親せき宅に避難、その後、指示のあった集会所に移動し、3日間そこで過ごしました。後で、わかったことですが、そこは一番放射線量の高い場所でした。国の情報が早く公開されていればと思います。

自宅は、地震で半壊。足の踏み場もないくらいで、屋根が壊れ雨漏りがひどく、大事にしていた漢文詩の自作品、自作小説、農業関係の論文などほとんど駄目になり、残念でたまりません。先日、一時帰宅をしましたが、行くたびに自宅の崩壊は進んでいて、今帰っても住めない状態です。そんな中、自作の漢詩を百編集めて編集した「誓願百絶」が奇跡的に雨に濡れずに一冊だけ残っていたのは、うれしいことでした。

6カ所目の避難先になる、この区民住宅には長女夫婦と3人で4月末に越してきました。南相馬や石巻から避難してきた14世帯が入居、同郷の方々が近くにいてとても心強いです。家主さんからは、空き室を避難者同士がいつでも自由に使えるようにと、提供いただきました。みんな

区主催の秋のコンサートに無料招待いただくなど、品川区からは、各情報を丁寧に案内していただき、区の対応には、とても感謝しています。娘には、「都会にきて、行動的になつたね。」と言われます。歴史や古文書に興味があるので、品川の寺院などに積極的に向かっています。弓道場にも道を尋ねながら行きましたが、皆さん丁寧に教えてくれます。この住宅は、来年7月までの条件で提供いただいているので、その後はどうなるのか不安もあります。

品川の人情にふれ、心地よく暮らしていますが、やはり浪江が恋しくなることもあります。いつも近くにいた兄弟ともなかなか会えないし、浪江町は「となり組」の意識の高い土地柄で、助け合いながらの生活は当たり前です。野馬追いなど、歴史ある行事も多い浪江町に、帰れるものなら帰りたいですね。



▲年齢より若く見える矢野正さん(79歳)と長女の千鶴子さん

矢野正さんからのメッセージ
4月末、品川区はじめ、関係機関団体の厚意により、区借上げ住宅にて生活しています。ここ、品川は江戸時代の名残りと美風を今に伝え、人情厚き良い街で、多くの方々の御懇情に支えられ、予想だにできなかったここでの暮らし、人々との交流は終生忘れ得ません。



鈴木 荘司さん・みよ子さん(幾世橋)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：10月16日

今一番の楽しみは、浪江の知人・友人と話をすること

震災後、仙台そして秋田に避難し、その後4月中旬から仙台市太白区の集合住宅に在住。荘司さん、みよ子さん、息子さんの3人で暮らす。近くには娘さんや甥さんが在住され、行き来して助け合いながら暮らしている。ご自宅は幾世橋芋頭。



▲避難先の集合住宅のリビングにて

浪江で暮らしているときは、商店を運営していました。思い出すのは、店に買い物に来てくださった方たちの顔。振り返ると感謝の気持ちでいっぱいです。故郷を離れてみて感じたのは、浪江は気候が穏やかで海・山・川があり季節ごとに楽

しい町だったなということ。悪い所は一つもありませんね。

今住んでいる集合住宅は、静かで緑も見え、そして、病院やスーパーも近くにあり、暮らすという点では申し分ありません。ですが、家にこもってばかりではダメになると思い、仙台を知るために自転車で出かけたり、近所のお店の手伝いやボランティア活動などを行っています。こんな生活の中で楽しいと思えるのは、浪江で一緒だった友人・知人と会い話をすること。先日は、仙台駅近くで浪江町出身の方が店をオープンされたので訪問しました。

今の思いは、「浪江町をルーツに持つ人たちのご恩に報いるためにも必ず帰りたい！」ですが、元の商売を再開できるかが悩みです。今はそのときに備え、自分は何ができるかを考えプランを練り、行政の力も借りながら頑張りたいです。復興には個々の力が大切だと思っています。



木村 敏さん(幾世橋)

取材者：(特活) 新潟NPO協会 富澤
取材日：9月10日

これからもふるさとを思いながら、暮らしていきたい

町で3代続く、はんこ屋だった木村さん。一家7人で新潟市に避難し、今は2世帯にわかれて生活している。

私たちは、浪江町に住む両親と叔母の7人で、3月15日に新潟に避難してきました。新潟市出身の妻の実家に避難した後、新潟市の公営住宅に引っ越しました。その後、7人では、狭かったため両親と叔母、私たち夫婦と子ども2人の2世帯にわかれて、民間の借り上げ住宅に引っ越しました。わかれたとはいえ、両親と叔母は隣のアパートにいたので、子どもたちも毎日行き来しています。

子どもたちは友だちもでき、私も仕事が決まり、新しい生活をスタートさせていますが、時々寂しさを感じることもあります。そんなこともあり、離れ離れになってしまった仲間と電話やメールなどで互いの暮らしぶりや浪江町の情報などをやりとりしています。

両親は、先日浪江町から配布されたフォトビジョン(電子回覧板)を活用し、情報を受け取っています。県外にいる者にとって、情報が届かなくなることは不安なので、こうした広報紙や電子回覧などのしくみはありがたいです。これからもふるさとを思いながら暮らしていきたいですし、心の支えにつながるので、今後も続けてほしいです。



▲左から敏さん、陽菜ちゃん、真樹子さん、天馬くん



群馬県

遠藤 明美さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室 櫻井
取材日：10月15日

震災が招いた現実を受け止めて、 前向きに生きていく



▲恭介君(5歳)と明美さん

数日前に、浪江の自宅に初めて一時帰宅することができました。雑草などで荒れ果てた街並みにシヨックを受けました。避難後はいつもテレビの中に見ていた浪江の風景が、実際に目の前に現れ、あらためてこの震災が現実なのだと思えました。そして、この現実を受け止めなければならぬ。むしろしっかりと受け止めて前向きに生きていかなければならないと思っています。私、浪江町児童館での仕事

中、子どもたちの帰宅時間のため「さようなら」をしているときに大きな揺れに遭いました。先生方と不安になる子どもたちから声をかけ、揺れがおさまってから子どもたちを車に乗せて高台に避難しました。震災後、離ればなれになってしまった長男の恭介とは5日後ようやく会うことができました。泣きながら抱きあつたことを思い出します。津島、会津、郡山、そして茨城にある夫の実家などを転々として、いまの群馬県大泉町の公営住宅に4月上旬から住んでいます。同じ建物の中に、福島県から避難されてきたご家族も何軒かあり、浪江の方とも親しくさせて

いただいたいます。震災後まもなく、津波の夢を見たりして眠れないことがあり、精神的に不安定な日が続きました。保育所に通う恭介もなかなか新しい雰囲気慣れず苦勞しました。今は、恭介にもお友だちができて楽しく通い、運動会では自転車に乗りスラロームを披露しました。知らない土地にきて、仕事もまだ見つかっていないこともあつて、いまは同郷の皆さんとお話することが私の支えです。11月は浪江の十日市です。こ

ちらでコスモスの花を見かけると、浪江でもコスモスがきれいだったことを思い出します。町民の皆さんは、どこでどんな思いで生活されているのでしょうか。それがまったく分からないことが不安を増しているように思います。勤めていた浪江町児童館の子どもたちやご家族の皆さんにもお会いしたいです。8月末に二本松市で開催された児童館の修了式に、恭介の体調が悪く出席できなかったことがとても残念です。浪江町児童館に通っていた子どもたちには、新しい環境で慣れるのに時間がかかると思いますが、たくさん食べて、遊んで、楽しく過ごしてほしいです。最初のころは、すぐにでも浪江町に帰りたいと思っていましたが、時間の経過とともに子どもたちの安全のことを思うとそれも言えないと考えてしまっています。ただ、以前は毎日のように孫の恭介と会っていた私の両親とも離れたままです。何よりも私は生れてからずっと浪江町で生活してきました。いつか必ず皆さんと浪江町で再会できる日が来ると信じて、その日まで頑張っていきたいと思っています。



埼玉県

小泉 舞華さん(中2)(川添)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室 櫻井・竹内
取材日：10月8日

いつも「浪江のこころ通信」を 楽しみにしています

いま住んでいる埼玉県行田市のアパートは、浪江町を離れてから5カ所目の住まいです。4月から通っている中学校では友だちもたくさんきて、浪江のときと同じソフトテニス部に所属しています。こちらの中学校は、1学年に5クラスもあって浪江東中の2倍以上の生徒数、弟の拓己が通う小学校は請戸小の6倍の生徒数です。毎日楽しい学校生活ですが、なんとなく浪江の中学校のときと雰囲気違います。休みの日などは、友だちと自転車で隣の熊谷市に買い物などに行きますが、ゆっくりに友だちとおしゃべりしていた浪江のときの過ごし方とはちょっと違います。うまく言えませんが、浪江とは時間の流れが違う感じがします。

浪江のときの友だちや担任の井上先生にも会いたいです。東中学校で仲良しだった友だちと東京でときどき会ったりすると、それから井上先生がメールを送ってくれて私たちを励ましてくれることがうれしいです。浪江にいたころは、Wonder なみえ というよさこい踊りのチームに所属していました。それから、なみえ焼そばを歌や踊りで応援する「NYTS」の活動にも所属していました。しばらく活動はしていませんでしたが、9月の末に磐梯熱海で開催された「うつくしまよさこい」で久しぶりに仲間と一緒によさこいを踊りました。本当に楽しかったです。そういえば、いつもなら浪江ではもうすぐ十日市です。おいしいなみえ焼そばも食べたいです。

いま不安なことは、浪江で知り合いだった人たちが、どこで何をしているのかがまったく分からないことです。だから、この「浪江のこころ通信」を楽しみにしています。例えば、私たちに連絡が来ている甲狀腺の検査などは、浪江のときの学校ごとに実施すればみんなにも会えるのではないかとお母さんと話しています。もう一つ不安なことは、来年、高校受験になるのですが、どこで受験することになるのか決められずにいることです。福島に帰るのであれば福島で受験したいですが、こちらで受験す

▲弟の拓己君(左)と舞華さん



ばこのまま埼玉で生活することになるのかなあと思ったりします。私は早く浪江町に帰って、以前の生活がしたいです。いつかみんなに会えるまで、勉強もスポーツも頑張ります。7月末から23日間、ニュージールランドにホームステイに行きました。初めての経験でしたが、たくさんの出会いがありました。マイペースで元気に頑張っています。



紺野 堅吉さん(南津島)

取材者：(特活) ビーンズふくしま 豊田
取材日：10月6日

郡山市熱海から皆さんへ

現在、福島県の郡山市熱海町で借り上げ住宅に暮らしている紺野さん。父と妻、娘の4人で暮らしています。故郷をはなれて、環境に馴染むのに時間がかかりましたが落ち着き始めた様子です。浪江への思いが強いことが感じられました。

地元の毎年ある伝統の祭り、自宅近くでよく聞いていたパークゴルフ場など、思い出深い景色が鮮明に浮かんできます。なにより、一番は浪江の方々、仕事をしてくれた仲間、近隣の方々、

懐かしく思う風景
震災の後、私たち家族9人は3月13日に郡山市大槻町に避難しました。その後、娘夫婦と孫は茨城県つくば市へと移りました。私と妻、父、娘の4人は3月20日に、ここ熱海町の借り上げ住宅へと越してきて仕事に着きました。熱海町は温泉地として有名で、時折利用して心と体を癒しています。この生活にも当初より慣れてきました。やはり津島の風景が懐かしく思い、心寂しく思うときはあります。先日の帰宅で、震災の後を見てもきましたが、復興に時間がかかることを実感しました。私の自宅も住むことが難しい状況を知りました。帰宅したことで、故郷にとっても愛着があることをあらためて実感した機会でもありました。

またお会いできる日を
緑豊かな故郷に帰れる日を待ち望んでいます。町に戻れる日が来たら、落ち着いて生活したいです。行きつけだった居酒屋で友人たちと飲みたいですね。いつかまた会える日か来ると思いますが、気を落とさないでほしいと願っています。



▲またお会いできるのを楽しみに



原田 徳郎さん(立野)

取材者：(特活) ビーンズふくしま 中鉢
取材日：10月16日

つながりを取り戻して、浪江に帰ることのできる見通しが持たたい

原田さんは、定年退職後に家業の梨づくりを継いで5年になり、まさにこれからというときの震災・原発事故だったそうです。3月12日に避難の指示があり、家族で福島市の福島高校の避難所へ避難。その後土湯温泉の2次避難所へ移り、5月末から家族5人で福島市町庭坂の借上住宅で生活しています。

地震のときは梨畑で仕事をしていたときでした。ひどい揺れで梨の木にしがみついていた。ひどい揺れは2回目の揺れも来て、これはひどいと感じました。家に戻ったら、中はガチャガチャになっていて、おさまってから片づけをしました。電話も通じず、夜はろうそくの生活で、双葉町の作業所に勤めていた家内も一晩帰ってこれませんでした。3月12日、家内が作業所のメンバー2人を連れて戻ってきたので、その家族の消息を探して富岡・川内とまわりましたが、見つから



▲左から 徳郎さん、妻の知恵子さん、母の喜代さん、父の繁雄さん

らず12日の夜には再び家に戻ってきました。夜、防災無線で20km圏内避難の指示が出たので、父・母・私・家内・息子の5人と作業所のメンバー2人と犬を連れて、車2台で着の身着のまま避難しました。津島、川俣と避難して行きましたが、どこもいっぱい、夜中の1時半すぎに福島高校の避難所にとどり着きました。街中の避難所だったので医療的な面などではよかったです。避難者同士お互いの顔が見えたのは心強かったです。ただ、まだ寒い時期での体育館の生活はこたえました。4月7日まで避難所で生活し、次に2次避難で土湯温泉の旅館に移りました。少しは落ち着いたものの、家族5人で1部屋の狭さです。旅館にいた間に家探しをしましたが、家を決めてから入居までには手続きなどもあつて1カ月かかりました。土湯温泉には5月27日までいたのですが、借上げ住宅に移ったのは早い方だと思います。

借上げ住宅なので、まったく近所に知り合いがない状態でした。携帯電話で連絡先がわかっている知り合いのところや親戚のところには行ってみたいという思いがあります。生活はなるようにしかならないけれど、家ならできるといってもなかなか自分の思うようにならないと感じます。横のつながりが切れてしまったので、どういう形で取り戻していったらいいのか。鉄道や道路も南北に分断されている状況なので地域的には相当なダメージです。今は、いつ帰れるのか誰もわからない状態です。役場も皆も大変だとは思いますが、情報や見通しがほしいです。

家の中のものには倒れたり、壊れたりしたものがありませんが、建物や屋根は無事でした。ただ、電気や水道も通じていないし、警戒区域で許可なく入ると罰せられる。すぐに帰れないというのが残念です。生活はなるようにしかならないけれど、家ならできるといってもなかなか自分の思うようにならないと感じます。横のつながりが切れてしまったので、どういう形で取り戻していったらいいのか。鉄道や道路も南北に分断されている状況なので地域的には相当なダメージです。今は、いつ帰れるのか誰もわからない状態です。役場も皆も大変だとは思いますが、情報や見通しがほしいです。

います。同じ地区の方でもバラバラになっています。友だちや同級生の消息、お互いの様子も知りたいです。家や畑が警戒区域になってしまった後、2回の一時帰宅がありました。畑はすっかり草に覆われて、動物が寝そべった跡があつたり、人が住まない状態になるとこんなに荒れてしまうものかと思いました。家の中のものには倒れたり、壊れたりしたものがありませんが、建物や屋根は無事でした。ただ、電気や水道も通じていないし、警戒区域で許可なく入ると罰せられる。すぐに帰れないというのが残念です。生活はなるようにしかならないけれど、家ならできるといってもなかなか自分の思うようにならないと感じます。横のつながりが切れてしまったので、どういう形で取り戻していったらいいのか。鉄道や道路も南北に分断されている状況なので地域的には相当なダメージです。今は、いつ帰れるのか誰もわからない状態です。役場も皆も大変だとは思いますが、情報や見通しがほしいです。



木幡 ^{かざ} ^ね 風音さん(苧宿)

取材者：(特活) ビーンズふくしま 豊田
取材日：10月11日

いちょうの木がまた見たい

寒さに凍える中、スパイクを持って避難した風音さん。地震の翌日は、とても楽しみに待ち望んでいたステージで走れることを願って、スパイクを持っていました。今もなお陸上を続け、大会にむけて日々努力しています。

地震があつて避難したのは12日の夜でした。父と母と私は、原町の馬事公苑へ車で行き、14日まで居ました。15日の早朝に、自宅にガソリンを取りに行つてから、新潟経由で石川県の実家へと行き、5月の連休明けに郡山市へと来ました。新潟のパークキングエリアで初めて温かい食事をしたことが、心に残っています。

今は、郡山市の貸家で父と母と3人で暮らしています。ここから郡山北高校に通っています。郡山北高校の中に、サテライト高として小高工業高校内にクラスがあります。学校では、少しずつクラスメイトが転校してきますが、たくさんの友だちができました。親身な先生がいまですので安心していきます。

学校だけでなくいろんな人と知り合えて、友だちになれることが楽しく感じています。そしてなにより、陸上を続けられることがとてもうれしいです。

陸上にずっと打ち込んで、小高工業高校に入ってから大好きな先輩とリレーをすることが夢のひとつでした。その夢は叶

いませんでしたが、次の新しい夢をもって部活に励んでいます。

石川県の実家にいたときに、両親から石川の星稜高校へ入ることを勧められました。「福島に帰りたい。」との気持ちが強く、こちらに来るようになりました。やっぱり、福島にしていると落ち着きます。

浪江町の風景、自分の家が懐かしく思います。一番好きなのは、大きな自分の部屋から見える大きないちょうの木です。この季節は紅葉してとてもきれいで、見ているだけで癒されます。

毎年、元旦は初日の出を見に請戸海岸まで行っていました。早朝に1時間かけて行つて、体がかじかむほど寒かったですが、その景色を友だちと一緒に見ることがとても好きでした。

学校の近くの「いどがわ商店」も思い出深いです。よく帰りに、友だちと一緒に立ち寄っていました。

思い出す度に「町に帰りたい」と感じます。

今は、地元に戻れなくてつらいですけど、いつか帰れる日に向けてがんばりましょう。



▲ふるさとを思い出すたびに帰りたいと思います



天野 慶子さん(権現堂)

取材者：(特活) 市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：10月7日

「そろそろ、『こうだったら』という思いを、言葉にしてもいいかな?」と思っています

浪江町権現堂に住んでいました。今は、福島市笹谷の笹谷東部仮設住宅に落ち着きました。仮設住宅に入居とともに、浪江町同様に福島市内の郵便局で働きはじめました。浪江町では、浪江のこころ通信第3号に登場した婦人消防隊長木幡豊子さんの元で、副隊長をしていました。



▲すてきな笑顔って、結構難しいかな? (いえいえ、すてきです!取材者)

3月11日は、浪江郵便局で勤務中でした。すぐにお客さまの安全避難誘導に務め、最後のお客さまをお見送りした後、主人と小野田に住む実母と連絡を取り合い、高台へ向かいました。高瀬球場、浪江中学校、そして再び小野田へ。

12日早朝、「津島へ避難を」の防災無線の呼びかけに、浪江高校津島分校へ向かいました。いつもだったらそんなに時間がかからずに着けるところなのに、車がまったく動かず、着いたときはもう10時をまわっていました。

13日には、人々の数は600、700人に加え、最大では1,000人の人々が、教室や廊下にあふれました。思いもよらないことが次々と持ち上がり、校中のポットやストープをかき集めるなど、赤ちゃんや高齢者の方、お体の不自由な方への対応、と皆さんと知恵を出し合い、婦人消防隊員としても無我夢中でした。その後、寒さの避難生活に高齢の母の体調が気にかか

り、妹の住む福島市へ避難しました。

今、一番会いたいと思うのは、そんな非常時に出会った人々です。わが身を忘れ、目の前で次々起こる事態の收拾に、一緒に力を尽くした言わばチーム津島分校ボランティアの仲間たちです。

8月に、福島市の北幹線第一仮設住宅(福島北警察署北側)で開かれた盆踊り大会で、たくさんの浪江町の人に会うことができ、なみえ焼そばを口にできたのは、久しぶりに感じた安らぎでした。11月のあのにぎやかな十日市のお祭りも、盆踊り大会のようにこちらで開くなど、浪江町の人々が定期的に集える機会ができたらうれしいです。

初めての福島、初めての仮設住宅ですが、少しずつ慣れてきました。救命救急普及員としての活動はじめ、何かお役に立てることをこの仮設住宅から再開できたらと思います。そろそろ今の私たちがだからこそ言える思いを、言葉に出してもいいかな、と思っています。